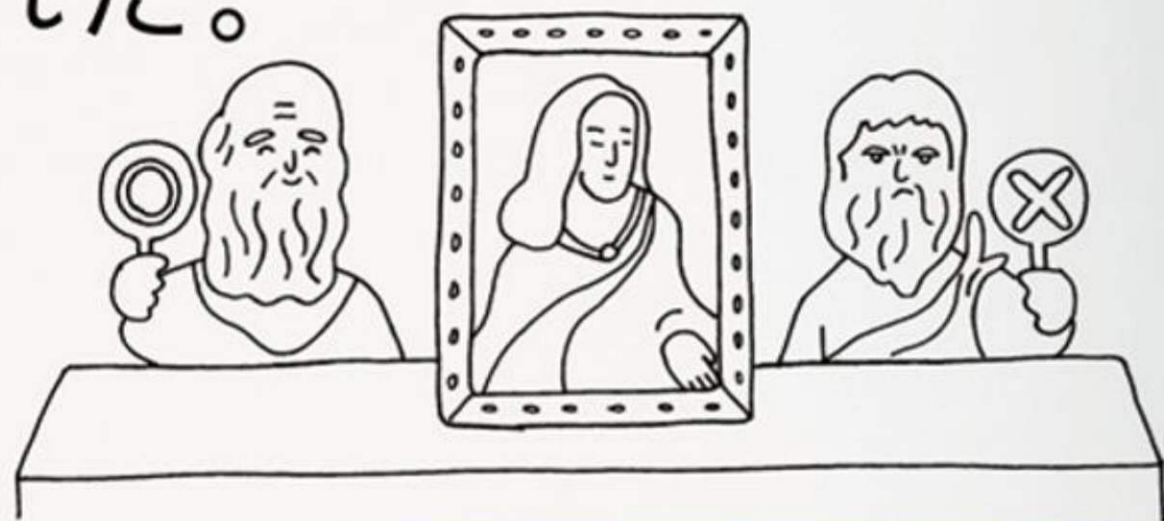


プラトンのころは、
けなされた。

ダ・ヴィンチのころは、
ほめられた。



アートは、どんなふうに語られてきたのでしょうか。
詫摩先生、教えてください。

古代ギリシャの時代。プラトンは「画家はウソつきだ」と主張しました。
たとえば、絵に描かれたベッドに、人は実際に眠れない。
つまり現実的に機能しないがゆえに価値がないというのです。
しかしルネサンス期になると、レオナルド・ダ・ヴィンチらは
「画家はあらゆるものを創造できる」と考えました。

現実には見えないものでも、恐ろしいものでも滑稽なものでも、
筆一本で生み出せる。なにより創造力こそ、アートの価値である
というわけです。アートやアーティストへの評価は時代ごとに
変わります。裏を返せば、その変化を巻き起こしてきたのも、
アーティストの反骨心や独創性。そう考えてもいいでしょう。
これから大学でアートを学びたい人にも、先人たちのような
大きな志を持って創作に向かってほしいですね。



芸術学科
准教授 詫摩昭人



現代人間学部

小田急線鶴川駅から

表現学部

徒歩約15分

経済経営学部

<http://www.wako.ac.jp/>

ひとりを光らせる

和光大学